

ゲンペイカズラの栽培に関する研究

2. 用土が生育に及ぼす影響

福 留 弘 康

緒 言

前報¹⁾では、指宿植物試験場でゲンペイカズラ (*Clerodendrum thomsoniae* Balf.) の栽培に最適な生育が得られる日照条件について報告した。従来指宿植物試験場では、ゲンペイカズラには山川土、ボラ細土、朽殻くん炭の3種の素材を容積比2:2:1で混合した用土で栽培を行っているが、混合割合の異なった用土の生育調査は行っていない。そこで本調査では、どのような混合用土がゲンペイカズラの生育および着花に適しているかを調査、検討した。

材料と方法

材料は挿し木由来のゲンペイカズラ苗を供した。挿し木は1994年4月20日に2節挿しした。1994年5月20日に形状のほぼ揃った苗を選び、山川土:ボラ細土:朽殻くん炭をそれぞれ容積比2:1:1, 1:2:1, 1:1:2 (以下山川土2, ボラ2, くん炭2とする)で混合した用土でプラスチック5号鉢に2本ずつ植え、1区当たり5鉢とした。鉢植え後ガラス温室の外南側の2段ベンチ下段(遮光率37.4%)においた。元肥は1鉢当たり成分N:16%, P_2O_5 :16%, K_2O :16%の複合肥料(高度48号, 関西日産化学株式会社)を2.5gずつ1994年5月27日に、追肥は元肥と同量を8月29日にそれぞれ置肥した。灌水およびその他の管理は慣行法で行った。

調査は草丈、葉数、幹径、着花、草姿について1994年6月8日から10月26日まで週1回行った。

結果と考察

草丈は9月2日までゆるやかに伸びたが、その後どの区も急速に伸長し、くん炭2, ボラ2, 山川土2の順で大となり、10月26日の調査終了日にはそれぞれの差は10cmであった(第1図)。

葉数も草丈と同じく用土区の順に増加した(第2図)。最終調査では、最大はくん炭2の26.0枚、最小は山川土2の22.2枚であった。

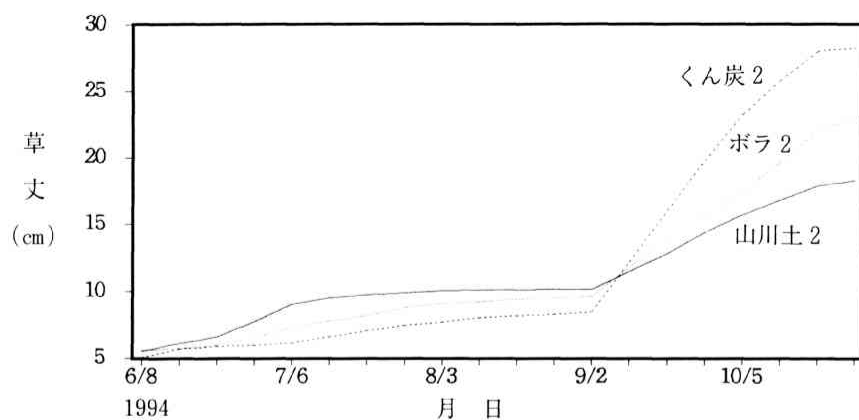
幹(径)は徐々に肥大し、肥大率は山川土2で136%, ボラ2で139%, くん炭2で154%となり、くん炭2が最も大であった(第3図)。

着花は7月6日~8月11日(1期)及び11月2日~12月31日(2期)の2期にみられた。総着花数(全ての株についた合計花数)は1期目の最大は山川土2の53個、最小はくん炭2の0個であった。2期目の総着花数は、最大はくん炭2の93個、最小は山川土2の51個であった。着花1, 2期の着花株数を比べると山川土2はほぼ同じで、ボラ2, くん炭2は2期目に5株~6株の増加がみられ、最終的には各区とも半数以上の株に着花した(第1表)。

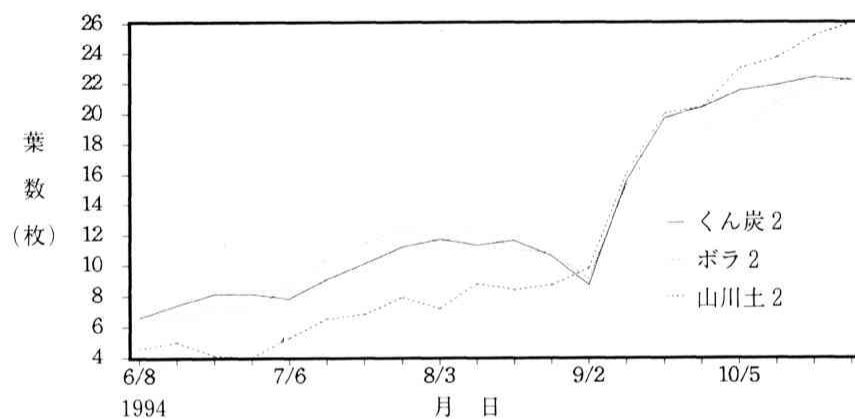
生育はくん炭2が最も大であったが、商品価値(草姿)の面から考えてみると、山川土2の場合、全体的に草姿が悪いうえ、鉢は他区より重かった。くん炭2は葉数、着花数、用土の重さに問題はないが、少し徒長気味であり、草丈と鉢とのバランスの点で観賞価値は低いと思われた。ボラ2は全体的にバランスがとれており、用土も軽く、着花株数も多いため、観賞および商品としての価値が高いと思われた。

今後の課題として、最適な挿し木の時期や挿し穂の部位などを調査し、計画的な着花および出荷できるような栽培体系を確立したい。

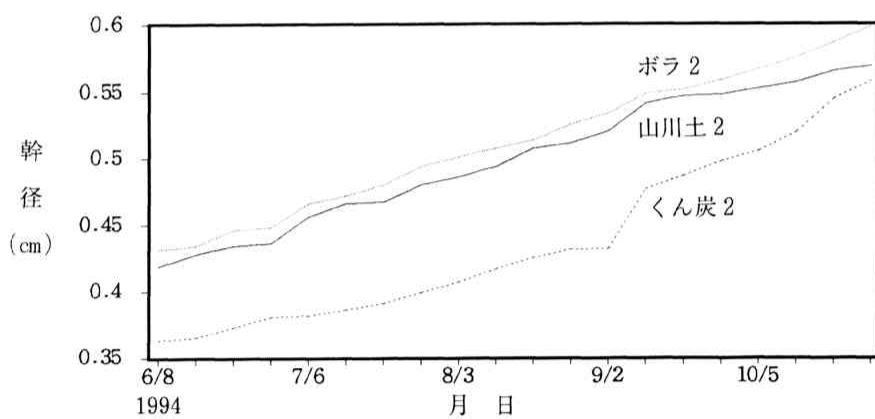
1) 福留弘康: 鹿児島大学農学部 農場技術調査報告書, 3, 6-7 (1995)



第1図 草丈の経時的推移



第2図 葉数の経時的推移



第3図 幹径の経時的肥大

第1表 総着花数と着花した株数

	着花期1 (7/6～8/11)		着花期2 (11/2～12/31)	
	総着花	着花株	総着花	着花株
山川土 2	53	6	51	5
ボラ 2	20	2	82	7
くん炭 2	0	0	93	6